

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 25 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520526

研究課題名(和文) 史的コーパスを活用した日英語の動詞と形容詞の文法化についての統語論的研究

研究課題名(英文) A historical-corpus-based syntactic approach to the grammaticalization of Japanese verbs and adjectives

研究代表者

小川 芳樹(Ogawa, Yoshiki)

東北大学・情報科学研究科・教授

研究者番号：20322977

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本語複合動詞の後項が文法化している事例については、これを機能語であるとする日本語学の分析と、これを常に語彙動詞であるとする生成統語論の分析があった。一方、本研究は、生成統語論の枠組みで、複合動詞の後項が機能範疇であることを示す議論を複数提示した。

また、研究代表者は、2013年2月に「言語変化・変異研究ユニット」を結成し、コーパスを活用する言語学者と理論言語学者が連携を図るための土台を築いた。そして、このユニットの活動の中で、研究代表者と分担者は、形容詞から前置詞への文法化、副詞からアスペクトへの文法化、複合名詞から名詞句への構文化などの事例をコーパス調査で確認し、これを理論的に説明した。

研究成果の概要(英文)：Japanese V-V compounds have so far received dual analyses: one approach, mainly advocated in traditional Japanese linguistics, claims that the second element of a V-V compound, if grammaticalized, is an affix or an auxiliary verb, while the other one, mainly advocated in generative linguistics, claims that it is always a main verb. With this background, we have provided several generative-linguistic arguments showing that such a lexeme is a functional category located somewhere in the universal functional hierarchy.

The research leader also established a research unit named "Language Change and Language Variation Research Unit" in 2013 as a forum for the collaboration between theoretical linguists and corpus linguists. And in its activities, we have elucidated a syntactic mechanism of how diachronic grammaticalization and/or constructionalization proceed from adjective to preposition, from adverb to aspectual functional categories, from N-N compounds to noun phrases, and so on.

研究分野：形態統語論、文法化、語彙意味論

キーワード：文法化 構文化 複合動詞 複合名詞 合成性 分散形態論 前置詞 アスペクト

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語複合動詞について、日本語学の領域では少なくとも 1950 年代から、その後項を本動詞ではなく補助動詞ないしは接辞とみなす分析が広く行われていたが、生成統語論の枠組みで影山(1993) (『文法と語形成』)はこの主張を根本から否定し、日本語複合動詞の後項を語彙動詞と再分析した。その後、影山の研究は日本語の複合動詞の形態統語論・語彙意味論的研究の主流となったため、日本語学の知見が生成文法の複合動詞研究の中で活かされることはなかった。しかし、Cinque (2006)のカートグラフィーによる再構造化動詞の分析が登場し、これを日本語複合動詞に拡張した Fukuda (2008)の分析が刊行されたことで、潮目が変わり始めていた。

その中で、研究代表者は、日本語の複合動詞について、西山國雄氏との共同研究を 2009 年頃から、新沼史和氏(本科研費による研究の分担者)との共同研究を 2010 年頃からそれぞれ開始していた。この研究は、日本語学の領域での複合動詞研究と影山(1993)の複合動詞の分析と Fukuda (2008)の分析の三者を融合させ、統語的複合動詞と語彙的複合動詞を含むすべての複合動詞のうち、後項が本動詞の本来もつ意味を表さず文法化を遂げているものについて、カートグラフィーと分散形態論に基づく統一的分析を提案したものである。この分析は、日本語学の伝統的分析が含意していた「後項 = 機能語」という主張を生成文法の枠組みで復活させた、ということの意味する。

(2) 研究代表者と研究分担者は共に理論言語学の研究者であり、本課題への申請時まで、コーパスを活用した言語学も歴史言語学もほとんど未経験であったが、2009 年頃から、BYU コーパスや国立国語研究所コーパスをはじめとしてユーザーフレンドリーな史的コーパスが近年続々と公開されはじめ、この領域での理論言語学的研究が可能になって

きたことを踏まえて、理論言語学者もコーパスを活用したデータの収集と分析をすることによって今後の研究分野の発展に寄与できるのではないかと考えたことが、この共同研究を始める契機である。

## 2. 研究の目的

(1) 上記(1)に関しては、Nishiyama and Ogawa (2009) や Ogawa and Niinuma (2011)等で示した「語彙的複合動詞と統語的複合動詞に対するカートグラフィーと分散形態論に基づく統一的分析」の妥当性をさらに裏付けるために、日本語複合動詞が関係する削除現象や日本語複合動詞と英語句動詞の平行性、副詞からアスペクトへの文法化、動詞のアスペクト解釈等の見地から証拠となる言語事実を集め体系化することが主な目的であった。

(2) 上記(2)に関しては、形容詞から前置詞への文法化、動詞からアスペクト・モダリティ機能範疇への文法化、複合名詞から名詞句への構文化など、従来、個別には知られていたものの理論的な分析のなかった領域において、史的コーパスでの量的調査に基づいて通時的な文法化と構文化の過程を明らかにし、これらの通時的な言語変化の過程を説明できる分散形態論の新たな理論を提唱することが主な目的であった。

## 3. 研究の方法

(1) 複合動詞・前置詞・形容詞の統語論・語彙意味論についての先行研究の批判的検討と代案となる仮説の提出

(2) 史的コーパス、現代語書き言葉均衡コーパス、幼児発話コーパス等からのデータの抽出と、その調査に基づいて得られた仮説の理論的妥当性の仮説演繹法による検証

## 4. 研究成果

(1) 日本語複合動詞についての研究代表者と研究分担者の共同研究の成果は、「動詞 + 上がる / 上げる」型複合動詞における後項が

助動詞またはアスペクト機能範疇に文法化していることを論じた 2010 年の日本言語学会発表論文が最初であるが、本科研費の申請課題による研究のもとでも、我々はこの方向性での研究を継続した。その中で、我々が、場所を表す助詞「に/で」と共起する動詞のアスペクト解釈の問題や、「N を始める」型の構文と削除現象 (pseudogapping) との関係、「放出動詞 (emission verb) + 出す/出る」(「流れ出る」「湧き出す」など) の後項の文法化についての成果を複数公刊したことや、未出版論文であった Nishiyama and Ogawa (2009) を引用した Fukuda (2012) が NLLT から刊行されたことなどの影響で、長年、複合動詞の後項はすべて語彙動詞であると主張してきた影山太郎氏までもが、近年(2013 年以降)では、自身の先行研究を一部否定し、カートグラフィーを採用した新たな複合動詞の分析を提唱しはじめている。このことは、研究代表者らの 2009 年以降の一連の研究成果が契機となって、影山(1993)以降 20 年以上にわたって連綿と続いてきた日本語複合動詞分析の流れの中に、日本語学における 1990 年代以前の研究成果を取り込むような新たな理論言語学の潮流が生まれ始めたことを示すものである。

(2) 文法化・構文化については、これをこれまで主に研究してきたのは認知意味論・構文文法理論の研究者たちであり、生成統語論の領域でこの問題に取り組むのは、Roberts and Roussou (1999, 2003), Los (2005), Waters (2009), Roberts (2013) など少数の研究者たちに限られていた。しかし、筆者および研究分担者の研究は、日本語や英語の文法化・構文化にまつわるさまざまな形態統語論的現象が、構文文法で言われるような記述的で恣意的な概念を用いることなく、「普遍的機能範疇階層に沿った上方再分析 (upward reanalysis)」や「機能範疇を含まない最小の構成素から機能範疇をより多く含むより

大きな構成素へ向かっての一方向的な通時的拡張」といった反証可能な仮説を用いて説明可能であることを示した上で、文法化・構文化にまつわるいくつかの問題は、統語論を中心とする理論言語学が取り扱える問題であることを示したという成果が大きい。

(3) コーパスを用いた統語論的研究については、古英語から現代英語までの通時的変化の過程を理論的に説明する研究は従来からあった。これは、生成文法の「原理とパラメータのアプローチ」の中でも GB 理論が出現した当初の 1980 年頃から極小主義理論がまだ進化の途上にあった 2000 年代前半までは、パラメータの中身を解明するための実証研究の一環として、言語習得過程の研究とともに盛んに行われてきた。しかし、生成統語論を生物言語学の一部として位置づけることを明確に打ち出した Chomsky (2005) 以降は、統語的現象の説明に利用可能な道具立てが進化論的に妥当なもののみ限定されるようになったことから、統語論が説明対象とする現象も大幅に狭められ、それまでコーパスを用いた生成統語論的研究がその主要な研究対象としていた通時的言語変化や言語習得過程の言語変化の事象は、極小主義理論の研究対象から除外されてしまった。そうして、生物言語学として先鋭化し、扱える言語現象も極小化した生成文法極小主義理論は、仮説の妥当性を豊富な言語現象に基づいて証明するという仮説演繹法による検証可能性を失いつつあり、これに付随して、そのフィールドで活躍する研究者の人口も減らしてきているように見える。一方、「構文」や「構文化」の過程は比較的コーパスで調べやすいということや、内的言語(文法)の形成は言語使用者にとって利用可能な発話データに基づく類推と般化によって行われるとする構文文法や認知意味論の研究者たちにとって、コーパスの出現と発展は、分析対象となる言語現象の急激な拡大を意味することな

どから、生成文法へのアンチテーゼとしての構文文法や認知意味論のもとでの通時的言語変化の研究も言語習得の研究は、近年ますます活気を帯び、研究人口を増やしてきている。このような研究背景の中で、「生成文法理論とは、個人の内省的言語知識という最小限の言語データからでも言語知識の本質に迫れるという立場に立ち、コーパスを否定し、近年利用可能になってきている豊富な言語データには目を向けようとしぬ説明中心の理論である」というような誤解に基づく否定的な言説が流布し拡散しつつある。このことは、誤った認識に基づく風評被害のようなものであり、生成文法の研究者にとって決して歓迎される状況ではない。もともと Chomsky (1965, 1986) は、コーパスからしか得られない言語習得や歴史的言語変化に関する事実も心的言語の解明に寄与すると主張していた。より最近の生成文法理論の中でも、Cinque (1999, 2006) や Rizzi (1996, 2004), Koopman (2001) などカートグラフィーの研究者たちは、現在でも、コーパスも含め、入手可能なすべての言語事実とそこから得られる記述的一般化が生成統語論の説明対象に含まれるという立場を堅持しており、生成文法理論全体が生物言語学的な議論以外のものをすべて排除してしまったわけではない。しかし、内部事情をよく知らない非生成文法研究者から、生成文法が、コーパスを否定する言語学者の集団として一枚岩になって見えているとすれば、そのような事態も問題である。

このような問題意識に立って、研究代表者がユニットリーダーとなって 2013 年 2 月に東北大学大学院情報科学研究科に設立した「言語変化・変異研究ユニット」は、理論言語学者のみならず、社会言語学者や歴史言語学者等もメンバーを構成する研究ユニットであり、これまで互いを敬遠する傾向にあった言語学の下位分野の研究者同士が、「コー

パスから得られる言語事実を踏まえて、言語変化・変異が起こる本質の解明を目指す」という共通の目標のもとに結集することで、これまでなかったような異分野間の知識の共有と学際的研究による予測不可能な化学変化が起こることを期待するものである。

実際、この研究ユニットが全国的に注目されていることは、2014 年 9 月 8-9 日に東北大学で開催した第 1 回ワークショップ(講師 11 名)に、二日間で述べ 60 名を超える聴衆が集まったことや、研究ユニットの目的を具現化する論文集の刊行を計画し寄稿を呼びかけたところ、統語論・形態論・意味論・社会言語学・歴史言語学・音韻論・言語習得理論・自然言語処理など多方面から 23 名もの研究者の賛同を得、(株)開拓社の企画会議も通過し、2016 年秋の論文集刊行の予定が決定した。また、2015 年 9 月 7-8 日には、研究ユニットの第 2 回ワークショップ(講師 13 名)の開催も決定した。

このような形で、従来なかった学際的研究ユニットの活動とその成果が注目を集めることは、研究対象や方法論が細分化したそれぞれの言語理論が内部で目標を先鋭化するばかりで横の連携がほとんどなかった 10 年前には想像もできなかった事態であり、コーパスという道具を介して異分野の研究者同士が融合し相互理解を深めるためのフォーラムとしての研究ユニットの活動は、今後、言語学の領域全体の活性化と新たな展開にも大きく寄与するという重要な役割を果たしていかなければならないと考える。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

1. "Auxiliation, Atransitivity, and Transitivity Harmony in Japanese V-V Compounds," Nishiyama, Kunio and Yoshiki Ogawa,

*Interdisciplinary Information Sciences 20-2: Special Issue on Grammaticalization, Lexicalization and Cartography: A Diachronic Perspective on the Interfaces between Syntax and Morphology*, 71-101, 2014年5月, 査読有.

2. "Diachronic Demorphologization and Constructionalization of Compounds from the Perspective of Distributed Morphology and Cartography," Yoshiki Ogawa, *Interdisciplinary Information Sciences 20-2: Special Issue on Grammaticalization, Lexicalization and Cartography: A Diachronic Perspective on the Interfaces between Syntax and Morphology*, 121-161, 2014年5月, 査読有.

3. "Grammaticalization of *Near* from Adjective to Preposition via Head-Movement, Gradability Declination and Structural Reanalysis," Yoshiki Ogawa, *Interdisciplinary Information Sciences 20-2: Special Issue on Grammaticalization, Lexicalization and Cartography: A Diachronic Perspective on the Interfaces between Syntax and Morphology*, 189-215, 2014年5月, 査読有.

4. Grammaticalization of the Particle *Away* in English: A Cartographic Approach," Fumikazu Niinuma, *Interdisciplinary Information Sciences 20-2: Special Issue on Grammaticalization, Lexicalization and Cartography: A Diachronic Perspective on the Interfaces between Syntax and Morphology*, 163-188, 2014年5月, 査読有.

5. "Review of *Regimes of Derivation in Syntax and Morphology*, by Edwin Williams, Routledge Leading Linguists 18, Routledge, New York, 2011, 184pp.," Yoshiki Ogawa, *English Linguistics* 31, 284-296, 2014年5月, 査読有.

6. "Aspectual Verbs and Pseudogapping in Japanese," Yoshiki Ogawa and Fumikazu

Niinuma, *The Proceedings of the 14th Seoul International Conference on Generative Grammar [SICOGG 14]*, pp.313-328, 2013年8月, 査読有.

7. "通時的な「自立語化」と「構文化」についての統語的一考察," 小川芳樹, 「日本英文学会第85回大会 Proceedings」, pp.91-92, 2013年7月, 査読有.

8. "On the Syntactic Licensing of Locative Expressions in Japanese," Yoshiki Ogawa and Fumikazu Niinuma, *Proceedings of GLOW in Asia IX 2012: The Main Session*, ed. by Nobu Goto, Koichi Otaki, Atsushi Sato, and Kensuke Takita pp.229-244, 2013年5月, 査読有.

〔学会発表〕(計6件)

1. 「コーパスを利用した日本語の ar 自動詞の形態統語論的分析」, 新沼史和, 東北大学大学院情報科学研究科・言語変化・変異研究ユニット第1回ワークショップ『コーパスからわかる言語変化と言語理論』(東北大学青葉山キャンパス)、平成26年9月9日.

2. 「複合語形成における合成性と構文化：幼児の発話データからの考察」, 小川芳樹, 東北大学大学院情報科学研究科・言語変化・変異研究ユニット第1回ワークショップ『コーパスからわかる言語変化と言語理論』(東北大学青葉山キャンパス)、平成26年9月8日.

3. "What Determines the (Un)ergativity of Emission Verbs: A View from Japanese V-V Compounds," Yoshiki Ogawa and Fumikazu Niinuma, NINJAL International Symposium 2013: Mysteries on Verb-Verb Complexes in Asian Languages, 平成25年12月14日, 国立国語研究所 (NINJAL), (ポスター発表、使用言語: 英語).

4. 「通時的な「自立語化」と「構文化」についての統語的一考察」, 小川芳樹, 日本英文学会第86回大会シンポジウム第6部門「文法化と語彙化とカートグラフィー：統語論と形態論

の境界をめぐる」(東北大学川内キャンパス)(司会:小川芳樹)、平成 25 年 5 月 25 日

5. “On the Syntactic Licensing of Locative Expressions in Japanese,” Yoshiki Ogawa and Fumikazu Niinuma, GLOW in Asia IX, 平成 24 年 9 月 4 日, 三重大学.

6. “Aspectual Verbs and Pseudogapping in Japanese,” Yoshiki Ogawa and Fumikazu Niinuma, 14th Seoul International Conference on Generative Grammar [SICOGG 14], 平成 24 年 8 月 8 日, Dogguk University, Seoul, South Korea.

〔図書〕(計 4 件)

1. 「日本語の複合動詞と「V+て+V」型複雑述部のアスペクトについての統語論的考察」, 小川芳樹, 『語彙意味論の新たな可能性を探って』, 由本陽子・小野尚之(編), 開拓社、平成 27 年 9 月刊行予定.

2. *Interdisciplinary Information Sciences 20-2 (Special Issue on Grammaticalization, Lexicalization and Cartography: A Diachronic Perspective on the Interfaces between Syntax and Morphology)*, Yoshiki Ogawa & Akiko Nagano (eds.) (特集号企画・編集責任者: Yoshiki Ogawa), 241p., 東北大学大学院情報科学研究科、平成 26 年 5 月.

3. 「複合動詞における助動詞化と無他動性」, 西山國雄・小川芳樹, 『世界に向けた日本語研究』, 遠藤嘉雄(編), 開拓社, pp.103-133, 平成 25 年 11 月.

4. 『言語におけるミスマッチ —福地肇教授退職記念論文集—』(Mismatches in Language) 菊地朗・小川芳樹・西田光一(共編著), 東北大学大学院情報科学研究科、226 頁、平成 25 年 10 月.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

< 言語変化・変異研究ユニット >

<http://ling.human.is.tohoku.ac.jp/change/home.html>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小川芳樹 (OGAWA, YOSHIKI)

東北大学・大学院情報科学研究科・教授

研究者番号 : 20322977

(2)研究分担者

新沼史和 (NIINUMA, FUMIKAZU)

盛岡大学・栄養科学部・准教授

研究者番号 : 40369814